

タイ北部のアユタヤ市からバンコク市内へ運ぶ3等列車の中で男は電車で揺られていた。車内は遠足だろうか、制服を着た小学生でゴったがえしている。アユタヤ市内を延々と歩き、遺跡を巡り、トゥクトゥクの運転手と運賃交渉で喧嘩して疲れていた。バンコクまで2時間、しばらく車窓を流れる風景を眺めていると、いくつかの視線が向けられていることに気づいた。小学生女の子数人が男をチラチラ見ている。怪しい人物に見えたか。確かに小学生集団の中に不精髭のサングラスをかけた男が立っただけで十分怪しい。すると、男以上に十分怪しいディアドロップ型のサングラスをかけた青年が声をかけてきた。「中国の人ですか？」たどたどしい英語だ。しかも何を基準で中国人なんだろうか。「いや、日本人だ。」男は答えた。おお、怪しい青年は驚いた表情を見せた。「いや、子どもたちが背の高いアジア人は珍しいから、どこの国の人かと話していたんですよ。」どうやら、この怪しいサングラスの青年は小学校の先生らしい。サングラス先生は子供たちにその男が日本人であることを告げると、子どもたちは何やらきょとんと隣同士で話し始めた。

そして男を自分の隣の席に招くと、日本について質問の嵐を投げかけてきた。「日本の小学校は何人くらいいるのか。」「日本の小学校は町に何校あるのか。」「日本ではどんなことを学んでいるのか。」「遠足はあるのか。」「制服を着なければならぬのか。」見た目同様な怪しい発音の英語の質問は、とても上等とは言えない3等列車の走行音でかき消されながらも、表情やジェスチャーでどうにか会話が成立した。サングラス先生と話に夢中で周りに気がまわっていなかったが、小学生たちは怪しい日本人と怪しい先生の会話を興味津々で見つめてた。汽車の中で2人ともサングラス、それはあまりにも怪しい光景だった。

質問攻めが一段落して、男は子どもたちの間に割って入った。子どもたちは何か言いたそうに身をよじり、友達同士でくすくす笑っている。どうもタイ人という国民は人見知りが多いのではないかと旅を続けていて感じていた。ホテルやコンビニの店員は礼儀正しいが、話しかけても無表情で素気ない印象を受けたのはそのせいだ。タイ語は話せないので簡単な英語で話しかけてみると、その中の1人の女の子が理解できるようで、学校のこと、友達のこと、今流行っていることを話してくれた。そこで男はガイドブックを取り出しタイ語の会話集のページを広げると、子どもたちはわあっと声をあげ、そこに載っている言葉を次々に指さして声に出した。最後には数字の読み方をお互いに教え合うことになり、子どもたちも一生懸命に「いーち、にいー、さーん・・・」と隣の席の子たちも身を乗り出して参加しての即席日本語教室が始まってしまった。お互いに共通の言語を持たないにもかかわらず、もっと教えてと好奇心に満ちた目で見られると、教えるっていいなとしみじみ実感させられる。その間、度重なるサングラス先生の質問攻撃をかわしながら、彼らの目的の駅まで日本語教室は開催された。

駅で一行と別れると日が傾いたせいもあってか車内は寂しい雰囲気にも包まれていた。そう感じていたのは男だけだっただろうが、ガランとした車内にOLらしき女性とバックパッカーの西洋人カップルが1組、地方から大量の食材を持ってきた年配の女性も何とも物憂げな様子で車窓を眺めていた。彼らもまた今日という一日を振り返っているのだろうか、それとも何か別のことを考えているのだろうか。汽車を降りるとあたりはすっかり真っ暗になっていた。中央駅のアラムポーン駅前には広げられている青空屋上でパッタイとトムヤムクンとミネラルウォーターを注文し、そこでたまたま居合わせた2人の日本人と意気投合して語り合い、朝予約した宿へ帰った。今日出会った人たちとはもう二度と会うことはないかもしれないが、彼らとの時間はしっかりと思い出として男の心の中に刻まれている。異国の地で人と出会い、その人たちと時間を共有するほど素晴らしいことはないなと思いつつ眠りについたのだった。

2 学年英語 男：渡司

週行事予定表 (2/23～3/3) 学年末考査も後半戦だ。自分の持てる力をすべて出しつくして、後悔のないように。

月	日	曜	行 事 内 容	備 考
2	23	土		
	24	日		
	25	月	学年末考査 第3日	8：20登校
	26	火	学年末考査 第4日 服装・容儀指導 卒業式の歌練習	8：20登校
	27	水		7：25着席
	28	木	卒業式準備・予行・同窓会入会式	7：25着席
3	1	金	第65回卒業式 卒業祝賀会	8：20登校
	2	土		
	3	日		